

第十三話 村雨の太刀

(昭和30年5月25日掲載)



元和元年五月大阪落城の時の出来事である。平野に陣を敷いた後藤又兵衛基次はひそかに、寵臣野田弥六正経を陣内に呼んだ。それは秀頼公を鹿児島にお連れ申すと言う事だった。

それでお前も血気に早やらず、早々に郷里守実の里に逃げ延びるように。自分は井福に籠るから、再起を計ろうと言うのだった。

野田弥六正経は、そう言われて見ると主人又兵衛基次に同調しないわけには行かない。

この合戦に於ける基次の家来は一万四千であるけれども、いづれも大野治長からあてがわれた弱小の兵だ。正経と生死を誓った武士は数える程しかない。之は淋しい事であると同時に、主人から再起を計られると、いささか望郷の念にかられざるを得ない。

正経は戦国乱世に乗り、青雲の志を抱き、又兵衛が長岩城を攻めると聞くや、その下に馳せ参じ長岩の戦、扇城の戦と宇都宮を滅ぼす合戦には手巧を立てた。又兵衛が不思議に主人黒田長政とがそり合わず、黒田藩を追われて落魄するに及んでは家来も又去って行ったのであるが、寡黙朴訥な弥六正経は、又兵衛基次の期に行ったと見えて、常にその庇護の下に豪勇無双の力量を得たので、その恩義に感じて立身出世の望薄い主人に従って生死を共にして来たのである。

又兵衛の言葉裏にも、秀頼を鹿児島に奉ずる事は万一の時の撓(どう)を頼んでの事だと察しられたし、弥六自身もそう考えたのである。名ある大将と取り組み、あとは天命を待つのみであると決心するや徳川方の豪勇広瀬岩見守の陣ずる与田山に、弥六き下の千二百人の屈強な野武士を引き連れて殺到したのである。

勝ちに驕って酒宴を張っていたし、名だたる大将は格式があつて易々と火急の伝達はできないし、五万の大軍を誇る広瀬の軍勢の立ち挙がるいとまも見せずに弥六の軍勢は、目指す大将の陣におしよせたのである。「そこにおわすは敵の大将と見付けたり。我こそは豊前国下毛の郡守実

の住人野田弥六正経と言うものである」と大音声に呼ばわった。

広瀬岩見守は、傾けていた酒盃を投げ捨て、烈火の如く憤り「汝等如きげす野郎の来るところではない。下がれ」と言ったが、鎧かぶとに目を付けハイ刀を由緒あるものにとらんだ弥六は、二三回切り結んだが、どちらも伯仲と見たので暇どっては面倒だと組打ちになった所弥六の方がいささか強かったのであろう。遂に首級を挙げたのである。岩見守の家来たちが集まって大乱闘になった時には、混乱に乗じていづれともなく逃げ去っていた。

どこをどう通ったのか、きびしい詮索を逃れて、郷里守実の里に帰りついたのは元和三年二月頃だった。白眼視するかと思っていたが、ひそかに悦んだ村人たちは、弥六の為に祝宴を開いた。その席上でうやうやしく村雨の太刀と言う、岩見守のハイ刀を見せて、一さし無骨な剣舞をやり、大坂の陣の武勇談を話して聞かせたのである。所がその合戦だんは、仲々面白いと村人の受けがよいので、弥六は退屈しのぎに一代記を物語り乍ら、郷里に引き籠もり、基次よりの便りを待ったのであるが、道明寺の合戦で、又兵衛は討死し、秀頼も又城を枕に自害して果てた悲報を聞き、今は之までと、大歳祖神社に村雨の太刀を奉獻して、又兵衛の好意に感謝し乍ら、元の百姓に還り、余生を農民としての生活を楽しみ、自適し乍ら往生したと言う。(完)